

取組概要

2025 年 1 月 14 日

(あて先)
埼玉県立大学 学長

候補者 所属学科 社会福祉子ども
氏 名 小川 孔美

私の取組は次のとおりです。

この度は、学生投票により、第 11 回道学教師理事長賞の候補者として選出いただき大変光栄に存じます。

私の専門分野、研究テーマは、高齢者福祉、専門職連携教育及び専門職連携実践です。担当する社会福祉士国家試験の専門科目「高齢者福祉論」では、介護保険法や老人福祉法、高齢者虐待防止法、バリアフリー法、高齢者住まい法、高年齢者雇用安定法、育児・介護休業法など高齢者に関連する多様な法律や実際の支援において根幹となる高齢者福祉の理念、また、IPW 論等の授業等でも高齢者と家族等の支援における関係機関と専門職の役割に関する知識と支援の実際を伝えています。毎年、「高齢者福祉論」授業の際、受講生対象に簡易なアンケートをとっていますが、自身の祖父母と過ごしたことのある学生は 1 割にも満たず、また、地域の高齢者と接した経験もほとんどないという結果が示されます。そのため、学生と接していると、高齢者・加齢に対するステレオタイプの偏見や差別、いわゆるエイジズム (ageism) が言葉や考え方に潜んでいたり、また、そういったネガティブな感情を通り越して無関心だったり、自身が関与するすべがないと考える傾向さえあることが時に気になります。

エイジズム (ageism) は、レイシズム (人種差別) とセクシズム (性差別) につづく、三番目の重い差別であるとアメリカの老年学者エルドマン・パルモア (Erdman B. Palmore) が主張してから、老年学において長く取り組まれている課題ですが、大学における机上の学びだけでは伝えられることは限られます。そのため、ソーシャルワーク実習をとおして理解を深める場が用意されていますが、すでに何らかの制度、政策にもとづく「支援の対象」となった人々と接する機会が多いため、地域で人がいかに生きているか、制度の狭間となっている人々はどのような環境にあり支援を求めているのか、多職種連携実践が重要ではあるが、地域にて高齢者及び各種専門職と実際どのように連携すればいいのか学ぶ機会は多くありません。

以上から、幾つかの市町村をベースとした自身の研究フィールドにおいて、ゼミ指導やサークル活動顧問として、地域の皆様、多職種と関係性を構築しながら、個を大切にともに生きるためにはどうすればいいか、学生自身が主体的に見だし支援が展開できることを意識しファシリテーションしてきました。

【埼玉県立大学学生ボランティア団体 MAGO の顧問として】

埼玉県立大学学生ボランティア団体 MAGO は、2014 年 6 月に設立したボランティアサークルであり、昨年 10 年目となり大きな節目を迎えました。当初、課題意識をもった学生らとよく話し合い「地域にお住まいの高齢者の日々の生活に寄り添い、お手伝いすることを目的とした学生ボランティア団体。『日々の暮らしに笑顔を』という理念」を持って活動すると明確にしたことにより、後輩にも伝わりやすく、また、地域でも活動についてご理解いただき関係性を構築しながら支援を展開できています。

学生ボランティア団体 MAGO の活動は実に多岐にわたります。

「高齢者様宅へのご自宅訪問」「スマホのお悩み相談会」「調理イベント」「社会福祉協議会が運営する『ふらっとおおぶくろ』での季節に合った様々なイベント企画・運営」「地域のいけ麺クラブ等と麺づくりを通じての交流会」「健康測定会への支援」「イオン薬局イベントにおけるレクリエーションや脳トレ等の支援」「毎月地域で行われる長寿誕生会での支援」「地域の方とのウォーキング会」等々、コロナ禍においても学生らが地道に活動を途絶えさせることなく継続してきたことにより、地域における大切な社会資源と認識され、多様な声をかけていただけるほどに成長しました。介護保険制度等の定められたサービスではニーズを満たすことのできない方への支援を、地域包括支援センターや社会福祉協議会、居宅介護支援事業所（介護支援専門員）、ホームヘルパーやご家族、自治会、地域支え合い推進員、福祉推進員らと連携しつつ、地道に丁寧な活動を継続しています。

特に個人宅訪問では、授業で「独居高齢者」「老々介護」「ダブルケア」「8050、9060 問題」などと十把一絡げの社会課題として伝えざるを得ない事象を、実際、在宅でほとんどの生活をベッド上で過ごす方、独りで暮らすことに寂しさを感じ生きがいさえもなくしている方、誰かと一緒に食事をしたいと切に願う方、終活をひとりでするのはわびしすぎると感じている方などへの様々な個への支援を通して現実の理解を深め、地域住民や専門職、自身も顧問として参加する毎月行われる定例会のなかで意見交換し試行錯誤しつつ支援を展開しています。また、個人宅訪問は時にあらゆる危険を伴います。医療従事者、各種専門職の安全確保の重要性が叫ばれていますが、利用者様はもちろんのこと、学生一人ひとりの安全と尊厳を保つために心を砕いています。

ボランティアは、自発的に、人が人としてともに助け合って生きる社会をめざし、自分の時間や労力を提供する活動ですが、依頼のあった場所に、ただ行き、言われたことだけを行うという活動ではありません。事前にメールや電話で、時には地域に出向き打合せを行うこともあります。地域の方と信頼関係を紡ぎ、次も学生に来て支援して欲しいと思っていただけるようなボランティアを展開することと、同時に、学生としての授業の履修、実習、自身の生活を成り立たせるためのアルバイト、社会人になる前にしたいことをする時間を確保しつつ、ボランティアを継続できるようにするための細やかな支援が必要と考え、学生一人ひとりの取り組み、声に意識と耳を傾けるように努め配慮してきたことが、このたび学生から

評価いただけたのだと思います。





【ゼミ及びやどり木 SPU binders（以下、やどり木）を通じたデジタルデバインド支援】
 かつて、越谷市の「地域支え合い会議」にゼミの学生らと参加する機会がありました。
 「地域支え合い会議」とは、住民の皆さんが主体となり、地域に必要な取組みの実現に
 向け検討を行う場です。地域支え合い推進員を中心に社会資源の把握や地域に「あつた
 らいいな（望み）」と思う取組みについての活発な意見交換があり、その際「埼玉県立
 大学の学生との交流」「ふらっと立ち寄れる場所」「高齢者への IT 教育」が挙がっていま
 した。「埼玉県立大学の学生が登下校する姿はよく見かけるが地域住民との関わりが少な
 いのは残念だ」「地域の誰もが気楽に立ち寄れる場所がもっと必要だよ」「高齢者のなか
 にはスマートフォン（以下、スマホ）とか持っていない人も使えていない人が結構いて困っ
 ているよ」などのご発言がありました。

自身の研究の一環として地域支え合い会議、社会福祉協議会、地域包括支援センター
 等のご協力を得て開催することになった『「県立大学生と一緒に学ぼう」スマホ相談会』

において、スマホを活用できずにいる高齢者の皆様とともに、スマホの使い方を学ぶ機会や交流をととして、一人ひとりのニーズに合った支援のあり方、及び地域課題解決のために必要なことは何かを検討する機会を持つことができました。その機会をもとに、学内で地域住民の方へのスマホ支援を継続して展開するやどり木サークルを学生とともに立ち上げ、顧問として支援しています。毎月、大学において展開するスマホサロンも2025年1月にて29回目となりました。また、その後他市町村からお声かけいただき、公民館やサロン、スマホ相談会の企画、運営も行政や各専門職の支援をいただきながら、学生らを中心に行っています。



デジタルデバイドとは「インターネットやパソコン等の情報通信技術を利用できる者と利用できない者との間に生じる格差」です。国民生活のインフラストラクチャーとなりつつあるインターネットの利用状況において、60歳以上、年齢層が上がるにつれて利用率は下がる傾向がみられており、その状況は、最近の我が国の社会的課題である「孤立化」の面においても特に「高齢者単身世帯」等に影響を及ぼしていると言われています。また、高齢者におけるインターネット未利用者にはデジタル関連技術の習得方法において「習得に無関心」「習得機会がない」人が多いことも指摘されています。

物心がついた時点ですでにインターネットやパソコンが身近にあったデジタルネイティブ世代である学生にとって、地域住民と関わってみなければわからないデジタルデバイス支援について、顕在ニーズだけでなく潜在ニーズにも心を行き届かせ学生とともに模索したいと思います。

『埼玉県 5 か年計画大綱～日本一暮らしやすい埼玉へ 令和 4 年度～令和 8 年度』によると令和 22 年（2040 年）には約 230 万人まで増加し、県民の 3 人に 1 人が高齢者となる見込みです。また本県の 75 歳以上の後期高齢者は、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、いわゆる団塊世代の高齢化に伴い平成 27 年（2015 年）から令和 12 年（2030 年）までの 15 年間で約 1.6 倍の約 128 万人に増加するとも言われ、この間の後期高齢者の増加率は全国で最も高く、社会に与える影響の大きさなどを考えると、異次元の高齢化とも呼べる状況を迎えています。

公立大学として地域に根差し、地域の実態を踏まえた教育研究や、地域のステークホルダーとの継続的な対話の機会の確保がより重視されるなか、昨年、専門職連携教育（Interprofessional Education：IPE）の発展と地域における専門職連携の強化を図る拠点となることを目指した専門職連携教育研修センター（通称：IPE センター）が開設されました。センター員として IPE の基本である“ともに学び合う”姿勢で「ケアの質向上」につなげるべく、これまでの知見を活かしながら、今後も研究と教育に精進し、社会・文化的側面を含む様々な次元における実践と学問への貢献ができるよう努力を重ねていきたいと思っています。

最後になりましたが、これまでご示唆やご助言、また様々な形でご協力、ご支援いただいております皆様に深く感謝申し上げます。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。